

# R7 年度平和使節団 個人報告書

牛久市教育委員会

**研究課題：伝えていこう。あの日のことを。**

牛久第一中学校 2年 樋口 彩乃

**1 研究課題設定の理由**

「あの日、8月6日に何が起きたのか。何があったのか。どんな状態だったのかを一人でも多くの人に伝えていきたい。そして、戦争ということについてじっくり考えるきっかけになってほしい」という思いからこの研究課題にしました。

**2 研修の記録****(1) 被爆体験者のお話から学んだこと**

今回、被爆体験者としてお話をしてくださった梶本淑子さんは、当時14歳で被爆し、とても悲惨な思いをしたといいます。太陽が見えず、建物もなく大好きだった町が一瞬でかき消されたという話を聞いて衝撃を受けました。他にも、梶本さんは目の前で死んでいく人や水をあげたくてもあげられないかわいそうな人たちが死んでいく所を見たといいます。このようなことが絶対にあってはならないと改めて強く感じました。

**(2) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

原爆ドームで学んだことは、原子爆弾がどれくらいの威力だったのか、また、どれくらいの被害だったのかを自分の目で見られたことです。

平和資料館で学んだことは、実際に被爆した人の服やTシャツ、自転車など他にも色々なものを見られたことです。特に階段に残った陰が衝撃的でした。

**(3) 放射線影響研究所訪問から学んだこと**

私たちのために、難しいことをわかりやすく教えてくれたおかげで、放射線について興味を持ちました。被爆者の人と私たちではどのような違いがあるのか、原爆にはどれくらいの放射線が入っているのかを調べてみたいと思いました。

**3 研修を終えて****(1) 友達や家族に伝えたいこと**

原爆の悲惨さや恐ろしさ、そして、いま普通に生活しているのは当たり前とは思ってはいけないということを一人でも多くの人に伝えたいです。

**(2) これから行動していきたいこと**

私がこれから行動していきたいことは二つあります。

一つ目は、自分で周りに伝えることです。誰かが伝えなければいつか忘れられてしまう可能性があります。なので、実際にこの目で見てきた自分だからこそ伝えられることがあるのではないかと思ったので、自分から進んで伝えていきたいです。

二つ目は、梶本さんの言っていたことを忘れないことです。「奪っていい命なんて一つもない」「命を大切にしてほしい」「小さな積み重ねが大きな力となる」と言っていたことを忘れずに生活していきたいです。

**研究課題：核爆弾の恐ろしさ**

牛久市立牛久第一中学校

2 年

原田 拓歩

**1 研究課題設定の理由**

私が平和資料館に行き、特に心に残ったのは核爆弾についてです。広島を一瞬にして壊滅させた核爆弾には、約 50 kg のウランが搭載されていました。ですが、実際に核分裂が起きたのは 1kg 以下だったということを資料館で初めて知りました。もしそれらすべてが核分裂を起こしていたらと考えるだけでも恐ろしいです。さらに今では、広島に落とされた原爆の数千倍にも及ぶ威力を持つ核爆弾を保有している国があることも知りました。そのような核爆弾の恐ろしさをたくさんの人に知ってもらいたいため、「核爆弾の恐ろしさ」を研究課題にしました。

**2 研修の記録****(1) 戦争当時の牛久の様子（講話）から学んだこと**

牛久市は空襲などによる直接的な被害は少なかったが、物資不足や金属回収令によって牛久市の人々の生活は苦しかったということが分かりました。戦時中にはどこも平和な場所がなかったと改めて知り、戦争が恐ろしいものだとい今まで以上に思えました。いま私たちが暮らしている牛久市からは想像するのが難しいですが、この牛久市にも苦しい生活を強いられていた時代があったのです。

**(2) 被爆体験者のお話から学んだこと**

講話をしてくださった梶本さんは、戦争・原爆に対しての思いがとても強かったです。実際に被爆を体験した人でないと分からないような具体的な話を聞いて、戦争はとにかく残酷で、繰り返してはいけないものだということがすごく伝わってきました。そして、梶本さんが最後に言っていた「命を大切に」という言葉は、戦争を体験した人全員が伝えたかったことなのではないかと思いました。また、この使節団として広島に行くことになるまで自分は、戦争に関する本やテレビを避けて生活をしていたため、梶本さんの「無知が腹立たしい」という言葉に私は、少し罪悪感を覚えました。

**(3) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

平和資料館では、80 年前の 8 月 6 日まで生きていた人、原爆症により命を落としてしまった人たちの使っていたもの、着ていた服、本人の写真がたくさん展示されており、戦争の辛さが分かりました。見るのがとても辛かったです。そして、被爆し命を落としてしまった小中学生の言葉を見ると非常に悲しくなりました。特に、「敵機が来た 自分は心構えができていた」という言葉が戦時中の恐ろしさを感じさせます。

また、原爆により即死してしまった人はもちろん苦しただろうが、原爆から何とか生き延びることができた人や、原爆によって死んでしまった人たちの家族はもっと辛かったのではないかと考えました。そして原爆ドームを目の前で見たとき、写真では絶対に感じるることのできない圧のようなものが感じられました。まるで自分が終戦直後の広島にいるようで恐ろしかったです。

(4) その他、広島訪問から学んだこと

資料館に訪れる外国人が多いということも分かりました。私はもっと多くの外国人に来てもらい、戦争の無意味さや悲惨さ、核爆弾の恐ろしさを多くの人に知ってもらいたいです。そして、その核爆弾を自分たちの国も保有しているかもということを確認してもらいたかったです。

3 研修を終えて

(1) 友達や家族に伝えたいこと

私が友達や家族に伝えたいことは二つあります。一つ目は、戦争はいつ起こってしまうのか分からないから、命を大切に生きてもらいたいということです。二つ目は、私たちが平和資料館で学んできた「戦争は残酷だ」ということ、「もう繰り返してはいけない」ということです。これらを伝えることで、今がすごく幸せだということが改めて実感できると思います。

(2) これから行動していきたいこと

私がこれから行動していきたいことは二つあります。一つ目は、戦争の悲惨さをたくさんの人に伝えることです。今回の資料発表の機会を利用して、一人でも多くの人が戦争への考え方を変われるように、現地でしか分からないようなこと、感じたことを一生懸命伝えたいと思いました。二つ目は、現状から目を背けないことです。たしかに、戦争に関するニュースを見るのは辛いです。ですが、日々戦争に関するニュースから目を背け、いざ「ニュースを見てみよう」としたときには戦争が始まっていた。こうなっては元も子もありません。私は、戦争に関するニュースを見ないほうが怖いと思いました。そして自分でそうするだけでなく、たくさんの人にそう意識してもらえよう、伝えていきたいと思っています。

**研究課題：現地で学んだことを簡潔にまとめ核爆弾の恐ろしさ  
また、過去の日本で起こった事を詳しく伝えること。**

牛久第一中学校

2年 谷津 あさひ

**1 研究課題設定の理由**

被爆体験者の梶本さんが講話の最後に話していた  
『最近の若い人たちは何も知らない(中略)  
なぜ唯一の被爆国の日本に生まれた人が核の恐ろしさを過去の日本で起きてしまった過ちを知らないのか。それがただただ悲しいし怒りがわいてくる。』  
という言葉聞いて、体験者から直接話が聞くことが難しくなっている今だからこそ、私達中学生が体験者の話を伝えていこうと思ったからです。

**2 研修の記録**

**(1) 被爆体験者のお話から学んだこと**

14歳、同学年で同じ年の子がいる年齢。  
何一つ私たちと変わらない子供の時、どれほどの苦しみを味わったのかを聞いて言葉が出なかったのを覚えています。  
同じ学年の子、同じ学校の子があの日目の前でがれきに埋もれ冷たくなって帰ってきたときの衝撃と自分もそうになってしまうのだろうかという不安を梶本さんは声にしてくれました。  
阿鼻叫喚の地獄絵図の中、生き抜こうと傷ついた両手足や体を動かすということがどれほどの痛みを伴ったか、家族と生きて再開できるかも分からない暗闇の中、広島を歩いた心情は私たちが汲み取ることのできないほどだったと思います。  
それでも梶本さんは原爆の後遺症に苦しみながらも、こうして生き残ったのは何かの使命であると思い私たちに伝えてくれました。伝えてくれてありがとうの気持ちも込めて皆に伝え、世間に問いかけていきたいと思います。

**(2) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

当時の被爆物や着ていた服、色々なものが資料館に置かれていました。  
核爆弾が落とされる前日に書かれた手紙、当時着られていたボロボロの制服、本当にあの瞬間に人がいたのだとその人の声の代わりに私たちに訴えかけてくる物たちがいました。  
その中でも私の目についたのは被爆者の絵でした。  
石津さんという方が描いた絵で当時の詳しい状況が書かれた文末に  
『原爆がこわい、原爆がこわい』と書かれていました。  
そこで私は初めて当時の人の感情に触れたような気がしました。写真やモノだけでは感じ取ることができない感情に。  
当時の写真も見ました。写る人、皆目が濁っているように感じました。どこを見ているのかわからないうつろな目。少しだけ恐怖を覚えてしまいました。  
その写真の説明を見てみるとほとんどの写真はアメリカ軍が撮影したものらしかった。  
少しなんとまあ、皮肉だなと胸が痛んだ気がしました。

(3) その他、広島訪問から学んだこと

個人的に被爆体験者のお話の次に印象深かったのは、袋町小学校でした。被爆後すぐに臨時の救護所になったこの小学校には、多くの人がここに家族が訪れているかもしれないと探しに訪れていました。そのため、小学校の壁や黒板にはチョークで書かれた家族の安否を確認する文字や自分の居場所を書き記した文章が多く書き残されていました。

3 研修を終えて

(1) 友達や家族に伝えたいこと

学んだこと、印象深かったことをすべて話したいと思っています。発表では使うことができない自分の心情を入れながら伝えていきたいと思っています。

(2) これから行動していきたいこと

まず一番の行事は学校での発表だと思っています。この発表が一番多くの人に自分たちが学んだことを伝えられるチャンスだと思います。学校での発表以外でも、この貴重な経験を生かした行動を積極的にしてみたいと思いました。

**研究課題：原子爆弾の被害**

牛久第一中学校      2年   井川   蓮未

**1 研究課題設定の理由**

インターネットでは調べてもわからない被害や、被爆体験者の話や資料館で見てわかることを広島がどうなってしまったのかもまとめつつ、原爆がどれくらいの威力があるかを伝えて、戦争や爆弾はいけないことだと伝えて平和がどれだけ大切かを伝えたいと思ったから。

**2 研修の記録****(1) 被爆体験者のお話から学んだこと**

爆発直後に一瞬で建物が壊れて焼け野原になっていて、小さな一つの爆弾で半径2kmほどの建物がすべて潰れてしまい当たり前のように住んでいたところがなくなってしまっただけでこれからどうすればいいのかわからない状況でも死体の処理の手伝いなどをして生活していたのが分かった。

体の痛みを少しでも和らげるために手を前にしている人もいた。火傷をしている人は脱水しているため水を求めるけれど、水をあげてしまうと体が耐え切れずに亡くなってしまう。だからといって水をあげないと脱水が続いてしまい亡くなってしまうので、あげた人もあげなかった人も後悔してしまうということを知った。そして、命を大切にしてほしいという願いを学校の人達に伝えたいと思った。

**(2) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

実際に着ていた服や被爆にあった人の写真、絵など当時の状況を詳しく知ることができたり、お弁当箱や三輪車があったりなど生活感を感じられるものもあった。原爆が落ちる前と落ちた後の写真もあり、どれだけの被害が広島にあったのかが分かった。

**(3) 放射線影響研究所訪問から学んだこと**

放射線にも名前があったり、浴びる場所や位置によっても影響が違ったりすることが分かった。距離によってもどのくらい浴びるかが変わること、毎日浴びる量も変わることが分かった。放射線影響研究所は世界最大規模の研究所で、12万人で70年強調調査していることを知った。

**3 研修を終えて****(1) 友達や家族に伝えたいこと**

原爆の被害でこれからの生活や自分の住んでいた場所がどうなるのか、周りの人たちがどうなるのかを伝えたいと思った。今生きて住んでいることを当たり前と思わないでありがたく思いながら生きていくという事を伝えようと思った。

**(2) これから行動していきたいこと**

学んだことを友達や学校の人に伝えて、命の大切さや原爆の悲惨さを広めていきたいと思った。身近なところからみんなに気遣いをし、些細なことでも気づけるように周りを見ながら生活しようと思った。

## 研究課題：現在の戦争から見る広島原爆

牛久第三中学校 2年 鬼澤 知花

### 1 研究課題設定の理由

現在ロシアとウクライナなどの核保有国で争いが起こっていて、ロシアがいつ核を使用してもおかしくない状態です。このような世界の状況から改めて戦争の恐怖、悲慘さ、核が使用されたら私たちの生活はどうになってしまうのか、などを実際に核が使用された広島原爆で詳しく学んでいきたいと思ったので、この研究課題にしました。また、現在の核の威力が上がり、数も増えているのは簡単に知ることができるが、具体的にここ数年でどれくらい増えているのか、広島原爆の何倍の威力があるのかなどをこの平和使節団として、詳しく学びたいと思ったからです。

### 2 研修の記録

#### (1) 戦争当時の牛久の様子（講話）から学んだこと

戦争が起こるとその国全体に影響がでて、戦争に関係のない地域がなくなることが分かりました。具体的に戦争時に起きたことは、深刻な食糧不足や物資不足です。それによって飢餓者が出たり、町の金属である日用品や寺の鐘が回収されたりしました。また、戦況報告の唯一の手段である新聞の誇張された内容報告などもありました。最終的に一面に矛盾した内容が出てくるようになりました。これらのことから、戦争が行われると人々が苦しむことが平気で行われ、勝つためだけに多くの人が亡くなったことが分かりました。

#### (2) 被爆体験者のお話から学んだこと

私は資料館を訪れたり、さまざまな資料や本などを讀んだりしてもわからない核によって起きた悲慘な出来事を梶本さんの体験談を聞いて知ることができました。私の印象に残った事実は、なんとか生きていくためにほかの多くのことを犠牲にするしかなかったということです。具体的には、死体だらけであちこちで目玉や内臓が飛び出している地獄と化した道を裸足で歩いて避難したことによって、感情を失ったこととほぼ全身けがをしているはずなのに友達をタンカで運んで、痛みを失ったことです。感情や痛みを失ったのは一時的な話ですが、当時 14 歳の中学生がこのような形で感情、痛みを失う経験をするというのは異常なことだと私は思いました。現在世界には、核が 1 万 2000 発もあるといわれています。これらの核が使われて広島原爆、長崎原爆のような惨状を起こさせないために広島原爆を学び、伝えていく大切さが分かりました。

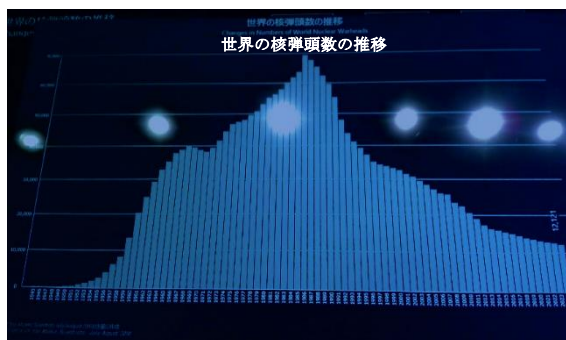
#### (3) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと

原爆が落とされた当時、体に直接の被害（熱線や爆風）を受けなくとも苦しむ人が多かったことを知り、とても衝撃を受けました。どのような人々がそのような被害を受けたのかというと、救援活動や親族捜しのために爆心地近くに入った人々です。その人たちは、原爆投下後の放射能でいっぱいの広島市に入り被爆しました。そのような人々の症状のなかで私が一番衝撃を受けたものは、被爆者の体にできた紫色の斑点です。この斑点は死の斑点とも呼ばれていて急性放射線障害の一つです。





この斑点がでたときの具体的な症状は、高熱、下痢、歯茎からの出血、髪の毛が抜けるなどで、数日後には亡くなってしまうケースが多かったらしいです。ただでさえ、得体の知れない爆弾に被爆して、苦しいはずなのに死の斑点という不気味なものが体にできたという出来事はその人の体だけではなく



心も蝕んでいったのではないかと考えてしまいました。また、世界の核弾頭数の推移というグラフを見ることができ、実はここ最近では核弾頭数は減っていることを知ることができました。その他にも、現在の爆弾である水素爆弾は広島型爆弾の約 625 倍であり、水爆実験で被害を受けた人も多いことを知りました。私は、広島原爆でたくさんの人が幸せを失ったことを学んだうえで、なぜここまでして人を殺す兵器を増やしているのか進化させているのかという疑問と悲しみの気持ちでいっぱいになりました。

#### (4) 放射線影響研究所訪問から学んだこと

私は平和資料館で原爆による様々な症状を見て、放射能による未知な病気を発症させるイメージを持っていました。しかし、この放射線影響研究所訪問で高線量の放射線は、病気を発症させやすくするだけで未知の病気を生み出すことはないということを教わりました。放射線影響研究所訪問では放射線の正しいかつ専門的な知識を取り入れることができ、とても良い機会だったと感じました。

#### (5) その他、広島訪問から学んだこと

私は原爆当時の市役所の情報がある広島市役所旧庁舎資料展示室を訪れました。そこでは原爆投下後の市役所で起こった出来事が記録されていました。また、被爆した市職員の体験が本にまとめられた「原爆体験記」などもあり、8月6日に起こった悲惨な出来事をいろんな人の視点から学ぶことができ、この広島市役所旧庁舎資料展示室でしかわからないものがあると思いました。

### 3 研修を終えて

#### (1) 友達や家族に伝えたいこと

私は広島から帰ってきてから、平和資料館で学んだことを基に現在の爆弾の実態について詳しく調べました。その活動から分かったことは、現在の核は広島や長崎の時のように爆撃機によって投下されるだけでなく、潜水艦やミサイルから核を使用される恐れがあるということです。しかも、世界には核が 12,000 発以上あると言われています。また、平和資料館の情報では現在は核だけでなく、水素爆弾という広島型爆弾の約 625 倍にもなる威力のある爆弾があるといわれています。しかし、ネットでは『ツァーリ・ボンバ』と呼ばれるソ連が開発した人類史上最大サイズの水素爆弾があり広島爆弾の約 3300 倍もの威力があるものもあるといわれています。その『ツァーリ・ボンバ』を東京に落とされたら約 860 万人の人が亡くなるとシミュレーションでは言われています。以上のことから、世界の爆弾は科学技術が発展するにつれて進化していることが分かりました。もし日本に現在の爆弾が落とされたら、私たちの生活は人の死が身近になり、食料や衣服、薬などいろいろな物資が不足します。

このような、現在世界の爆弾の危機感や広島で起きた出来事、もし日本が戦争に巻き込まれたらどうなるかを伝えていきたいです。

#### (2) これから行動していきたいこと

これからは、(1)のことを一人でも多くの人たちに伝えて、核や戦争について興味を持ってもらいたいです。

研究課題：**なぜ人々は争うのか**

牛久第三中学校      2年      山崎 希繫

**1 研究課題設定の理由**

課題研究は、「なぜ人々は争うのか」にしました。現在、世界では、ウクライナ侵攻、ミャンマー内戦、スーダン紛争などが起こっています。このような戦争で、たくさんの人々が悲しみ、苦しんでいるのに、なぜ人々は戦争を繰り返すのかを詳しく広島で知りたいと思ったからです。

**2 研修の記録****(1) 戦争当時の牛久の様子（講話）から学んだこと**

戦争当時の牛久は、戦争のために人も物資も動員され、中には、自分たちと同じ中学生やその他にも小学生などが、戦争のために働いていたと聞いて、とても驚きました。さらに、一日に配給されるお米は、300g（コンビニのおにぎりを100gとしたら一日におにぎり三個）だと聞いた時、どれほど悲惨な状況なのかが分かりました。その他に当時の牛久は、空襲の標的となるような軍事施設や大きな工場はなく、空襲による直接的な被害は少なかったそうです。しかし、霞ヶ浦近辺の一大軍事施設への空襲による通り道になっていたことが分かりました。

**(2) 被爆体験者のお話から学んだこと**

今回、講話をしてくださったのは、原爆の被爆経験者である梶本さんです。梶本さんは14歳の頃、爆心地から2.3kmの飛行機部品をつくる工場で被爆しました。梶本さんによると、大きな音と共に青い光を受け、これを爆弾だと思い家族の顔が頭に浮かんだと言っていました。工場は崩れ、下敷きになり足と腕が裂ける大怪我を負いましたが、一緒に働いていた友達と何とか這い出たそうです。火事になることを呼びかけ、そして町はグレーの渦を巻いたような光景であり、魚が腐ったような異様な匂いを感じたと言っていました。そこでは、自分の手を持って歩く中学生や子供を抱いて回っている母親などを見て、それを、お化けみたいだったと言っていました。その後、自宅のある町は焼け残っていると連絡があり、梶本さんは帰宅する途中で、父と再会しました。父は工場の焼け跡で名前を呼びながら、自分を探してくれていたと梶本さんは言っていました。この梶本さんの講話から現在では、あり得ないことが広島で起きていたことが分かりました。梶本さんの思いである、『一人でも多くの人に伝えてほしい』という言葉をしっかり胸に受け止め、8月6日に起きたことを人々に伝えていくことが、自分に託された役目だと実感したそうです。

**(3) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

今回、二日間訪れた平和資料館では、被爆者の写真や証言などを通じて原爆の実相などを知ることができました。広島に来たからこそ、得られる物が平和資料館ではたくさんありました。そのほかに、学校では学べないことなどを平和資料館では詳しく学ぶことができました。戦争当時の生活や戦争当時の悲惨さを学んでいる時、自然と涙が出てきました。この時、『もう戦争は二度と繰り返してはならない』と強く改めて実感しました。平和記念公園では、ガイドさんの話を聞き、広島戦争の歴史などを知ることができました。初めて、世界遺

産の原爆ドームなどを見て原爆の被害の大きさについて知ることができました。一つ一つの場所から原爆の被害や事の重大さを知ることができました。

### 3 研修を終えて

#### (3) 友達や家族に伝えたいこと

今回、広島訪問で学んだことで一番友達や家族に伝えたいことは、被爆者である梶本さんも仰っていた、『命を大切にしてほしい』という言葉です。この言葉を一番伝えたい理由は、この広島訪問で、命はすごく大切なものだとして改めて強く実感したからです。戦争は人の命を簡単に奪ってしまうものだから、明日の命に保証がないということが分かりました。だからこそ今、当たり前のようにある命ですが、それをとても大切にしてほしいからです。

#### (4) これから行動していきたいこと

これから主に行動していきたい事は二つあります。一つ目は、訪問してきたことをまとめて振り返ることです。何事もやって終わりにするのではなく、まとめて振り返ることが大切だと思うので、広島のことをしっかりまとめたいと思っています。二つ目は、学んできたことを周りの人に伝えることです。広島への原爆投下から 80 年の時が過ぎた今、被爆者がいない時代へとかけかけています。『二度と戦争を繰り返してはならない』この思いを胸に、原爆の被害を知る人たちが、次から次へと戦争の悲惨さなどを伝えていかなければなりません。そのためには、自分ができる最大限のことをしっかりやり抜き、今回広島訪問で学んだことをなるべく多くの人たちに伝えていきたいです。



**研究課題：戦時中、戦後の人々の苦しみを知ろう**

下根中学校      2年      千葉 真里

**1 研究課題設定の理由**

実際に被爆した方の話や当時の写真などから、被爆した方々がどのような苦しみを味わったのか、その苦しみに、何を次の世代に伝えていくべきなのか知りたいと思ったからです。また、戦後も被爆による後遺症などで苦しめられていたと聞いたことがあったので、生き残った人々がどのような生活をしていたのかということも学びたいと思いました。

**2 研修の記録****(1) 戦争当時の牛久の様子（講話）から学んだこと**

牛久が空襲の標的となることはありませんでしたが、一大軍事施設が広がっていた霞ヶ浦近辺が標的にされることがあり、牛久は爆撃機の通り道になることもありました。また、軍隊に直接関わる施設がなくとも、物資的・金銭的・精神的に多大な負担があり、人々を苦しめました。

**(2) 被爆体験者のお話から学んだこと**

原爆投下後、『脱水症状のある人に水を飲ませるとショックで死んでしまうから、飲ませてはいけない』という命令が出ました。しかし、投下中心地に近い場所で被爆した人の多くが周りの人に水を求めていました。水を求められた人の中には、命令を破って水を飲ませてあげた人もいたそうですが、やはり飲んだ人は「ありがとう」と言って亡くなったそうです。ところが、水を飲まなかった人も結局死んでしまい、水を飲ませてあげた人も、命令を守って飲ませなかった人も後悔しました。平和記念公園に池や噴水がたくさんあるのは、水を求めて苦しみながら亡くなった方々の冥福を祈るという目的があるそうです。

『忘れられた歴史は繰り返す。』梶本さんが言っていたこの言葉を忘れず、核兵器の恐ろしさを多くの人に伝え、原爆も戦争もない平和な世界をつくりたいと思いました。

**(3) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

爆心地は病院で、その病院にいた人は全員亡くなりました。しかし、出張で別の場所に行っていた院長だけは生き残り、広島で救護活動に取り組んだそうです。爆心地のまわりは3,000℃～4,000℃で、火傷をした人の多くが川に飛び込みました。多くの遺体は引き上げられましたが、今でも平和記念公園内の道や川の中に埋まっているものもあるかもしれません。そして、なんとか生き残った人も、原爆から放出された大量の放射線によって体をむしばまれました。外傷のない人や原爆投下直後に広島市内に入った人でも、高熱や下痢が続き、髪の毛が抜け、皮膚に紫色の斑点が現れ、死に至りました。

平和資料館では、被爆した人の衣服や爪、建物の一部などを実際に見たことで、原子爆弾によってたくさんの人が亡くなり、苦しんだことを改めて強く実感することができました。当時の資料や建造物を残していくことは、平和の大切さや命の尊さを伝えていく中で、とても重要だと思います。

#### (4) 放射線影響研究所訪問から学んだこと

放射線＝危険というイメージがありましたが、私たちは常に微量の放射線を浴びており、レントゲン検査のように私たちの生活にも利用されていることを知りました。それでも、原爆投下時のような大量の放射線を浴びると白血病になるなどの影響が出るため、注意しなければならないことが分かりました。

#### (5) その他、広島訪問から学んだこと

平和資料館などでは、様々な年齢・国籍の人が80年前に起こった悲慘な出来事について考え、思いを巡らせていました。しかし、私たちのような小中高生は少ないように感じたので、若い世代が平和について今以上に積極的に学び、平和の大切さを後世に伝える努力をする必要があると思いました。

### 3 研修を終えて

#### (1) 友達や家族に伝えたいこと

戦争はとても残酷なもので、絶対にしてはいけないことです。このことを忘れずに次の世代に伝え、戦争のない平和な社会の実現を皆で目指していく必要があります。

#### (2) これから行動していきたいこと

被爆体験者の方のお話で、『世界中の核兵器をなくせたとしても、作り方はわかっているから、どうせまた作られる。核兵器をなくすことは難しい。』という話がありました。だからこそ、核兵器の恐ろしさを伝えていき、核兵器保有国に核兵器を使わせないことが大事なのだと分かりました。今回の研修で見聞きしたことを身近な人に伝え、戦争や平和について少しでも関心をもってもらい、より多くの人に平和の大切さを知ってもらうことで、原子爆弾を含めた核兵器を使わせないようにしたいと思いました。そして、世界中に平和の輪を広げ、戦争を止める力にしていきたいです。

**研究課題：自分の身に戦争が起きた時どうなるのかを理解する**

下根中学校

2年

真船 実果

**1 研究課題設定の理由**

戦争について考えたとき、戦争は自分にはあまり関係ないと思っていたので、戦争がどのようなものか想像が付きませんでした。いつか被爆者の方々もいなくなってしまうので、より他人事と考える人が増えると思います。それを避けるためにまず、自分が戦争に巻き込まれたらどうなるのかを研究課題にしました。

**2 研修の記録****(1) 被爆体験者のお話から学んだこと**

被爆体験者は日本にしかいません。その方々が高齢になり、被爆体験を伝えることが難しくなっていることが分かりました。そして、聞いたままのお話をしっかりと私が伝えなくてはいけないことを学びました。一部ですが、梶本淑子さんのお話は次の通りです。

原爆が落ち、建物につぶされ、友達の叫び声で起きた時、梶本さんにはガラスが突き刺さっていました。ですが、痛みを感じることで生きていると感じ、嬉しかったそうです。やっとがれきから出ると、太陽も建物も何もなく、何が起きたのか分からなかったそうです。骨が飛び出て、皮がはがれ、血が止まらないような人々、歩くだけで人の皮や内臓を踏んでしまう、まさに地獄のような状況だったと知りました。

**(2) 平和記念資料館から学んだこと**

私は、実際にボロボロになった服やにぎやかな街が焼け野原になった写真、壁に突き刺さったガラスなど、原爆の強力さや破壊力が伝わる物を見ました。また、家族を亡くした人の記録やひどいケガをした人の様子、原爆が落とされた直後を描いた絵を見ました。建物を壊すだけでなく人々の生活を奪い、生き残った人々の心と体に大きな傷を残す戦争はあってはならないものだ学びました。

**(3) 平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

亡くなられた約7万人の方々を供養する原爆供養塔や原水爆禁止の思いが込められた平和の鐘、全世界に向けて原爆反対のチャイムが鳴る平和の時計塔を見ました。これらは、平和な世界を願う被爆者や、世界の人々の強い思いが詰め込まれていることを学びました。この平和に対する強い思いを、私の身の周りの人に理解してもらえよう、原爆による被害を学校の友達など身近な人に伝えたいと思いました。

**3 研修を終えて****(1) 友達や家族に伝えたいこと**

私は、原爆が落とされた日の状況や被害、戦争が終わっても続いた放射線による被害、被爆者の方々の体験や思いを、学習した内容を基に平和の大切さが伝わるよう、分かりやすく、具体的に伝えます。

**(2) これから行動していきたいこと**

私は、意見が異なる人とケンカにならないように、自分と相手の立場を考えた話し合いを出来るように努力します。具体的には、お互いの希望や譲れないことを伝え合って、お互いに相手を理解することです。なぜなら、お互いのことを考えられる人が増えることで、やがて戦争がなくなると考えたからです。

**研究課題：遺書に込められた想い**

下根中学校      2年   小山   純怜

**1 研究課題設定の理由**

戦争で苦しんだ人々がどのような思いで過ごしていたのかを知りたいと思ったので、このテーマにしました。また、人々が思っていた悲しい感情や苦しみなどを知って、それをみんなに伝えたいと思ったからです。

**2 研修の記録****(1) 戦争当時の牛久の様子（講話）から学んだこと**

牛久市は直接被害を受けたわけではないけれど、嘘の情報が流れていた事や事実が隠蔽されていたということがあり、とても悲しく感じました。当時、物資不足によりお米が1人1日あたり330グラム（およそおにぎり3個分）しか支給されないということを言っていて、被害を受けていなくても苦しんで生きている人々が大勢いることにとてもびっくりしました。

**(2) 被爆体験者のお話から学んだこと**

私が梶本さんの話を聞いて心に残ったことが2つあります。

1つ目は、友人の死体を運んで地面にある死体を踏みつけながら歩くということです。私はこの話を聞いて、とても怖くなりました。戦争というのはどれほど悲惨なことなのかを改めて実感しました。

2つ目は、梶本さんが言っていたお願いです。1. 命を大切にしてほしい 2. 原爆の恐ろしさを知ってほしい 3. 戦争の悲しさ、苦しさをみんなに伝えてほしいと言っていました。このお願いを聞いて自分の命を大切にしたい、次の世代に繋げていきたいと強く思いました。

**(3) その他、広島訪問から学んだこと**

私はこの3日間を通していろいろなことを学ぶことができました。初めて原爆ドームや平和資料館を見ることができ、亡くなってしまった人々の悲しみや苦しみを知ることができました。今も生きられている人もとても苦しみながら生活していることが分かりました。資料館の中では、とても悲惨なことが書かれており、とても悲しい気持ちになりました。二度とこんな戦争が起きないように私たちが平和の尊さを受け継いでいきたいです。

**3 研修を終えて****(1) 友達や家族に伝えたいこと**

原爆の恐ろしさや悲惨さなどをより多くの人に伝えて、1人でも多くの人を助けていきたいです。「捨てていい命なんてない」と言っていた梶本さんの言葉が胸に刺さって、家族や友人にもその言葉を伝えていきたいです。



(2)これから行動していきたいこと

私がこれから行動していきたいことは、「命を大切に扱う」ということです。戦争で亡くなられた人々は生きたいという強い想いがあったと思います。その人たちの分まで命を大切にしていきたいです。





**研究課題：原爆が与える影響**

牛久市立牛久南中学校

2年 涌井 啓冴

**1 研究課題設定の理由**

今まで原爆の存在は「恐ろしい」とだけ聞いていて、その原爆はなぜ恐ろしいのか、何があったのかを被爆体験者の話から詳しく知りたかったからです。

**2 研修の記録****(1) 戦争当時の牛久の様子（講話）から学んだこと**

牛久は直接戦場になったわけではなかったが、戦争のため人も物資も動員されていました。戦争の影響で物資不足となり、米などの食料については国民一人当たりの購入量が定められました。

**(2) 被爆体験者のお話から学んだこと**

まだ子供でも間接的に戦争と関わり、原爆によって全身が焼かれたり、足の骨が飛び出たり皮が垂れている状態の人もいて被爆者は心身ともにボロボロと言っていました。それでも大芝公園に友人を運ばなければならなかった。辺り一面に転んである死体をどけて内臓、肉片などが飛び散りながらも運び、友人は感情がなくなったりした。原爆の被害は計り知れないほど大きく誰もが持っている幸せになる権利を突然なくすものだ学びました。

**(3) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

原爆投下後の産業奨励館は「悲しみを思い出す」といった理由で解体を求める声もありました。しかし、被爆者の楮山ヒロ子さんの日記「あの痛々しい産業奨励館だけが、いつまでも恐るべき原爆を世に訴えてくれるだろう」との趣旨の記述を残したことで、保存運動が始まり、保存決議につながったのです。

**(4) 放射線影響研究所訪問から学んだこと**

被曝者は1年に浴びる放射能の約50倍以上の放射線を一度に浴びたため、原爆症は急性・後性に分かれて発病することがわかりました。

**(5) その他、広島訪問から学んだこと**

原爆投下後、食料事情が厳しくなり秋から冬にかけて栄養失調者が増加したこと。

熱線は爆発点はセ氏数百万度の小型の太陽、一秒後には半径200メートルを超える大きさに膨張し爆発地周辺の地表面の温度はセ氏3000～4000度、爆発点は数十万気圧という超高压となり、周りの空気が急激に膨張して、空気の壁(衝撃波)が広がるにつれ爆発点付近の圧力が大気圧力以下に下がり逆に内へ吹き込む状態が起こりました。

**3 研修を終えて****(1) 友達や家族に伝えたいこと**

命を軽く見ず、その命には、自分だけが傷つくのではなく、周りの大切に思っている人が悲しむこともあるから命は大切にしてほしいと伝えたいです。

**(2) これから行動していきたいこと**

知識だけを学ぶのではなく、そこに至るまでなど、深いところまで学びたいです。そして、原爆の恐ろしさを具体的に後世に伝えていきたいです。

## 研究課題：原子爆弾の悲惨さについて

牛久南中学校

2年 松本 一花

### 1 研究課題設定の理由

広島を訪問して、講話や資料館の見学を通して戦争や核の悲惨さと原子爆弾の被害の大きさをより深く知り、多くの人々に原子爆弾の悲惨さを知って貰いたいと思ったからです。

### 2 研修の記録

#### (1) 被爆体験者のお話から学んだこと

梶本さんの講話を聴き、当時の人々の生活の大変さを知りました。当時は食べ物不足でお米は無く主食は芋類だったそうです。その上原子爆弾が落とされて、もっと生活が大変になってしまいました。原子爆弾の当時の被害状況が、半径2km以内は全壊しほとんどが全焼しました。また、当時は木造が主流だったため、広島県の大半が半壊しました。そのため町の修復には時間がかかったようです。放射線や熱線による後遺症のケロイド、白血病、がんの影響で亡くなる人も沢山いたようです。また直接放射線に当たらなかった方でも救援・救助をしに来た人や家族を探しに来た人が、爆心地の近くにきて地上に残った残留放射線を浴び、放射線の影響によって病気にかかってしまった人や亡くなった人もいたようです。

語り部をしている方から直接当時の様子や状況を詳しく聞けて、資料だけでは分からない事を学ぶことが出来ました。

#### (2) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと

当時の日常生活で使われていた服や三輪車、弁当箱が当時のままの姿で残っているため、今と当時との違いがよくわかりました。また、原爆が落ちた後に使った担架や川や海から亡くなった方々を引き上げるための棒なども展示されていました。

そして、広島が被爆する前と被爆した後の違いがよくわかるような資料が沢山あり、広島を被爆したリトルボーイの模型図なども展示されていました。他にも当時の被爆された方の写真や当時の状況をもとに描いたと言われる絵を見ると、一瞬にどれほど多くの人が苦しい思いをしていたかが分かりました。写真も見るのがつらくなるような物もありました。

#### (3) 放射線影響研究所訪問から学んだこと

放射線影響研究所では、寿命調査、成人健康調査、原爆被爆者の子供に関する調査などの10つの調査や研究がされています。特に専念されているのが原爆被爆者の子供に関する調査で、人々が被爆してから遺伝や子孫への影響があるのかを長年研究されており原爆被爆者の子供に関する調査は、親の被爆による遺伝的影響があるかどうかを調べるために、被爆者の子供を対象とした調査を行っていて、最近では死亡率・がん発生率の追跡調査の継続と、遺伝子DNAの調査が行われています。また2002年からは、出生時には観察されないが中年以降になって生じる生活習慣病の高血圧や糖尿病などの症状の発症に関する臨床調査が行われました。この調査は、被爆二世団体の協力を得て行い、ご本人から受診の意思を確認できた方、約12,000人を対象として、約4年間かけて行われました。2010年11月より、前回とほぼ同じの12,000人を対象に健診が継続されて

います。今のところは子孫への遺伝はないこと、また数か月おきに被爆者の方々や子孫の方々などから血の提供をしていただいていることが分かりました。

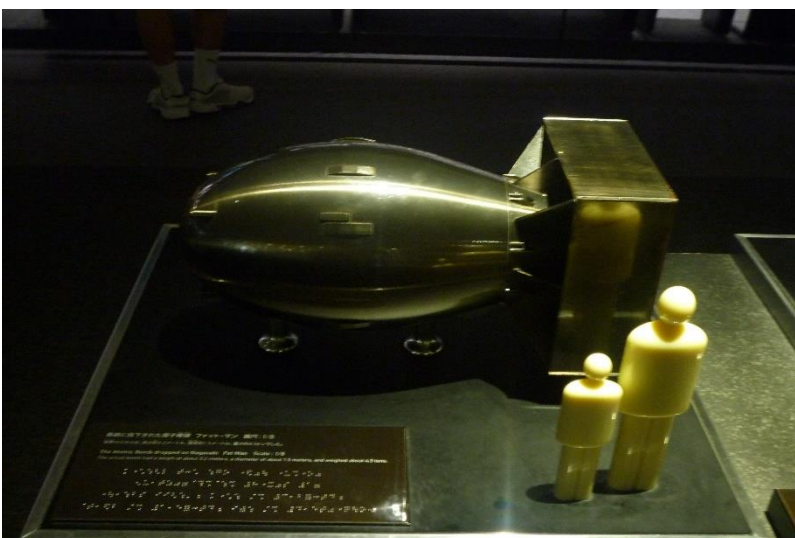
### 3 研修を終えて

#### (1) 友達や家族に伝えたいこと

原子爆弾の被害がどれほど大きくて、どれほどの犠牲者の方々がいたのか。絶対に二度と繰り返してはいけない事どれだけの命、人の大切な人が一瞬で無くなったのかそして戦争がどれだけ危なく悲しいことかまた被爆後から復興するまでにどれほど人々の暮らし方が変わったのかを伝えたいです。

#### (2) これから行動していきたいこと

今私にできることは、今回広島で沢山見たり、聞いたり、感じたりして学んできたことを出来るだけ多くの人々に伝えて、戦争や核の悲惨さを多くの人に知ってもらい広めていきたいです



研究課題：当時の広島の様子や戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさ、広島  
の悲しい過去を知り、市や学校のみんなに知ってもらおう。

牛久南中学校

2年 牧野 芽依

## 1 研究課題設定の理由

私は自分が広島に行き、学校の人や市民の人たちに広島での三日間、戦争や原爆、放射線などを  
知って興味を持って欲しいという意味でこの課題にしました。

## 2 研修の記録

### (1) 戦争当時の牛久の様子（講話）から学んだこと

・昔の牛久の近くに海軍の基地や軍工事がありそこが攻撃される事があり、牛久は敵が軍のところ  
を狙って通ることが多いことを聞いて、その敵の飛行機に積んである爆弾が間違えて牛久に落ち  
たら大変だと思いました。

・金属回収の話を聞いて、お寺が大切にしている鐘や人々が生活で使っているものなどを回収し  
て軍機を作って、昔の日本は人々の生活よりもアメリカなどに勝ちたい気持ちのほうが大きいのだ  
と思いました。

・昔の新聞は特攻隊が毎回敵の軍艦を落としたと言っているけど本当は多くの特攻隊が落として  
ない話を聞いて、日本はどうしても国民に「我がお国は優勢だ！」ということを嘘ついてでも伝え  
たかったのだと思います。

### (2) 被爆体験者(梶本さん)のお話から学んだこと

・梶本さんの「原爆が落とされた日の天気が雨や曇りだったら原爆が落とされなかったかもしれ  
ない」という話を聞いて、どうして当時晴れちゃったのだろうと悲しくなりました。

・梶本さんとその友達が建物の下敷きになって手足が動かなくなってしまったという話を聞き、  
このままでは助けを呼べないから何にもできないと思いました。

・疎開に行った中学生が被爆して被爆から三日後梶本さんが親に再開した話を聞いて私は被爆し  
たらもう家族とかに会えないと思っていたけど親に再開できる人もいるのだと思いました。

・梶本さんの「今の核兵器の威力は 80 年前の数十倍ある」という話を聞いて、もしもロシアな  
どが核兵器を使ったら 80 年前の広島よりも死者数や被害が大きくなると思いました。

### (3) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと

#### <平和資料館>

・核兵器使用の許可がサインや場所も決めたことを聞いてはじめ、核兵器は勝手に使っていたと  
思っていたけど、許可とっているのだと思いました。

#### <平和記念公園・原爆ドーム>

・平和の灯は核兵器がなくならない限り炎は消えないと聞いて、そうだったらあれから 80 年経っ  
てもまだ世界のどこかに核兵器があるって考えたらもし戦争してしまったどこかの国で核兵器がま  
た落とされたって考えたら大変って思いました。

・原爆ドームは被爆者たちが「見ていて嫌になる」という意見があったが、国が「今後の人たち  
にも原爆や戦争の悲惨さを教えるために残しておこう。」ということで残った話（何回も工事し

た。)を聞いて、確かに被爆者だったら残っていて嫌だけど今後のことを考えたら残っていていいと思いました。

#### (4) 放射線影響研究所訪問から学んだこと

日本の人間は実は放射線を1年間に2,4mmシーベルト前後浴びているという話を聞いて、自分は放射線のイメージは後遺症が残るだけ結構浴びていると思いました。

#### (5) その他、広島訪問から学んだこと

- ・本川小学校が被爆して数か月で学校を再開したことを聞いて、ほかの学校は結構時間が経ってからだけこの小学校は凄いいました。
- ・袋町小学校は校舎の壁に行方不明になっている人の名前を書いて伝える話を聞いて、被爆し、怪我をしながらこの小学校に来て名前を書くのを想像すると悲しくなりました。

### 3 研修を終えて

#### (1) 友達や家族に伝えたいこと

改めて広島に行って原爆の恐ろしさ危なさ戦争の悲惨さ被爆者のお話などを子孫にも伝えたいです。

#### (2) これから行動していきたいこと

- ・大人になって原爆の知らない子供たちに原爆の恐ろしさを教えてあげたいです。
- ・学校以外の知らない人にも教えてあげたいです。



**研究課題：原爆が落とされた後の広島には、どのような被害があり、そのあとどのような生活をしていったのだろう。**

ひたち野うしく中学校

2年 上原 和花

**1 研究課題設定の理由**

ニュースなどから広島には原爆が落とされた過去があることを知り、その原爆はどれほどの被害をもたらしたのか、そして被爆者はどんな思いだったのか、辛かったのかを学び、それを一人でも多くの人に知ってもらいたかったからです。

**2 研修の記録****(1) 被爆体験者のお話から学んだこと**

広島は当時軍都といわれるほど、軍隊の町であり、人口が多い大都市であったため原爆投下の目標となった要因と言われています。実際、原爆が落とされたとき一瞬にして何の罪も犯していない人々が大勢亡くなってしまいました。皮膚がただれ、お化けのように歩く人がたくさんおり、「水をくれ。」と何度も叫ぶ人もいたそうです。そして広島は二日間燃え続け、やっと移動することができたのは原爆が投下されてから、三日経ったときです。道は死体で埋め尽くされ、人が住んでいたとは思えないほど何もなかったそうです。

この話を聴いて、改めて原爆は恐ろしいものだと思います。私たちのような幸せな日常がたった一つの原爆により奪われ、約十四万人が命を落としたと考えると、二度と同じことを繰り返してはならないと思いました。そして、被爆者のためにも一人でも多くの人に原爆の辛さを伝えたいと思いました。

**(2) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

原爆ドームは被爆前のものと比べると、残ったのが奇跡と思えるほど、ボロボロの状態でした。私の想像をはるかに超える悲惨さでした。資料館では、「助けて」「水をください」動く気力もない母親の胸にすがる幼児。「目を開けて」「目を開けて」子供の名前を呼び続ける半狂乱の母親。思っていた以上に辛いものでした。そして、実際被爆した人は、心と体に大きな傷でき、一生残るとなってしまいました。

これらのことから原爆の悲惨さや被爆者の辛さを感じることができました。何には「こんなに辛い思いをするなら早く死んでしまいたい。」という言葉が書かれてあり、その言葉に私は心が痛みました。

**(3) 放射線影響研究所訪問から学んだこと**

私たちがいつでも放射線を浴びていて、原爆では強い放射線を出すため、その放射線を浴びると、白血病やがんなどを病気にかかりやすくなります。また、若ければ若いほど細胞分裂が活発なため、病気を起こしやすいそうです。たとえ距離が同じでも、被ばく線量が変わることがあります。

このことから、放射線の怖さを学ぶことができました。たとえ生き残れたとしても、放射線により紫色の斑点ができ、苦しみながら亡くなる人もいたそうです。



### 3 研修を終えて

#### (1) 友達や家族に伝えたいこと

原爆というのは、たった一つでも罪のない人々の命や未来を一瞬にして奪ってしまう恐ろしいものだとなえ、被爆者には体だけではなく、心にも消えることのない大きな傷を与えていることを知ってほしいと思いました。また、何があっても死の道を選ばず、今の自分の命を大切にしたいと伝えたいです。

#### (2) これから行動していきたいこと

核兵器をなくすために私たちができることは伝えて、被爆者の思いや辛さ繋げていくことだと思うので、一人でも多くの人に知ってもらうために周りの人に伝えて、行動を起こしていきたいです。また、自分の命を大切に、一日一日を大切に過ごしたいと思います。

**研究課題：原爆はどれほど恐ろしいもので、原爆が落ちた時ひとびとはどんな生活をしていたのか**

ひたち野うしく中学校      2年      吉田 千紘

**1 研究課題設定の理由**

毎年ニュースで8月6日に原爆が落とされたという悲惨な過去の内容を知り、原爆とはどういうものなのか、被爆体験者にとって原爆はどれほど恐ろしいものだったか、そのあとどんな生活をしてきたのかを知りたいと思ったからです。

**2 研修の記録****(1) 被爆体験者のお話から学んだこと**

広島は軍都といわれるほど軍隊が多い大都市であり、狙われやすかったそうです。原爆が投下された時、草も木もない、人間も住めない焼き野原になってしまい、2日間燃え続け、皮膚もただれ、お化けのように手を伸ばして歩く人が大勢いて、「水」「水をください」という人が沢山おり、水を飲めなく亡くなってしまう人が多かったそうです。人にはたった1つの尊い命があります。捨てていい命、奪っていい命なんてこの世に存在しなく、広島で起きた悲劇を繰り返してはいけません。伝えることを積み上げていけば核廃になると思いました。罪のない人の生活が一瞬にして奪われてしまう恐ろしいものだと思ふことがことができました。

**(2) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

思わず頭を下げた瞬間、突然全身が異様な閃光に包まれ、「助けて」「水をください」動く気力もない母親の胸にすぎる幼児。「目を開けて」「目を開けて」子供の名前を呼びつづける半狂乱の母親、想像を絶する光景が目の前に広がっていました。1人1人心からの叫びがあったことが分かりました。体と心に深く刻まれた傷ができ、一生残る傷となりました。このことからインターネットからは得ることのできない原爆という想像していたものを覆すほど原爆の怖さを自分の目で見て学ぶことができ、被害を受けた人には大きな傷ができました。

**(3) 放射線影響研究所訪問から学んだこと**

強い放射線に浴びると、白血病やがんになったり、紫色の斑点が出て死に至る人もいることが分かり、放射線が新たに病気を生み出すわけではなく、爆心地から約2kmで浴びる放射線は100ミリシーベルトであり、状況によって変化することが分かりました。放射線はたくさん浴びてしまうと、白血病やがんに影響してくるが、放射線で未知の病気を生み出すことを学ぶことができました。

**3 研修を終えて****(1) 友達や家族に伝えたいこと**

原爆とは罪のない人達の幸せな日常が一瞬にして奪われてしまう悲惨なもので、たくさんの尊い命がなくなってしまった事実、実際被爆した人には体と心に大きな深い傷を与えていることを知ってほしいと思い、今載せ活を当たり前に思わないで生活し、自分が持っているたった1つの命を大切にしてほしいと思いました。また、忘れたら歴史は繰り返されてしまう、絶対に忘れて



はいけないことを伝えたいと思います。

**(2)これから行動していきたいこと**

これから私は社会の状況を悲観せず、同じ思いで心を1つにし、核の廃止を呼びかける行動を起こすこと。核に依存している偽善者に政策転換を施すことをする。また、次の世代へ過去に悲惨なことが起きていることを伝え、1日1日を大切に過ごそうと思いました。

**研究課題：戦争当時の状況や原爆投下で起きた人体や建物への影響**

ひたち野うしく中学校 2 年 切畑伸一

**1 研究課題設定の理由**

社会の授業で第二次世界大戦について学びましたが、教科書に書いてある事実や写真を読んだり見たりするだけでは当時の状況が分かりませんでした。そこで、広島市を訪れ、被爆を体験した人のお話や平和資料館で学んだことをもとに詳しく知りたいと思ったからです。

**2 研修の記録****(1) 戦争当時の牛久の様子（講話）から学んだこと**

付近にあった軍事施設を攻撃するための爆撃機の通り道になっていたことがわかりました。また、牛久市が直接戦場になったわけではないが、戦場に出征兵士する人がいたり現在中学1年生、2年生、3年生、高校生の学生が学生勤労動員として軍需工場で労働をしていたということがわかりました。

**(2) 被爆体験者のお話から学んだこと**

今でいう中学3年生の時に被爆した梶本さんから話を聞きました。当時梶本さんは工場で働いていました。原爆が落ちた時は窓ガラスから真っ青な光がさしこみ、内臓がえぐり取られるような衝撃を受けたと聞きました。また、亡くなった方のご遺体を片付ける人がいなかったので踏みながら逃げたということを知りました。

**(3) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

被爆した人の中には全身に大けがや大やけどを負った人が「水、水…」とうめきながら亡くなってしまったという残酷なことがありました。水を求めながら亡くなった犠牲者の霊に捧げるに「平和の池」という噴水が作られたということがわかりました。

**(4) その他、広島訪問から学んだこと**

本川小学校は、広島市内の公立小学校では最初の鉄筋コンクリート造3階建ての校舎で、1928年（昭和3年）7月に建設されました。原爆により残骸のみになるほど破壊されましたが、鉄筋コンクリート造りだったということもあって、倒壊を免れました。被爆の翌日からは臨時救護所となり、多くの被災者が収容されました。

**3 研修を終えて****(1) 友達や家族に伝えたいこと**

武力によって行われる戦争の悲惨さ、平和と一人一人の尊い命の大切さ、世界全体で協力していく国際協調の大切さ、一瞬で当たり前の日常を奪い、罪のない人々が死んでしまう原子爆弾のおそろしさを伝えていきたいです。

**(2) これから行動していきたいこと**

原爆資料館や被爆者の講話を聞いて、なぜ原子爆弾が炸裂したとき青白い光が見えたのか、長崎と広島ではなぜ違う物質の原子爆弾を落としたのか、核保有国はなぜ核を手放さないのかなど今回調査したことで新たに生まれた疑問点を詳しく調べていきたいと思いました。学校で発表するときは、学習前の自分のように今回のことを詳しく知らない人のために市の代表として実際に広島市に行って体験してわかったことを詳しくわかりやすく説明していきたいです。

**研究課題：戦争の恐ろしさと影響**

おくの義務教育学校      8年      久下   杏

**1 研究課題設定の理由**

広島を訪問して、最も伝えるべきな事だと思ったから。そして、自分が学んできた事に合っていると感じたから。

**2 研修の記録****(1) 戦争当時の牛久の様子（講話）から学んだこと**

戦争当時の牛久市は、直接戦場になったわけではないけど自由に動ける環境ではなく、食料なども足りず、十分な暮らしができなかったという事を知りました。

**(2) 被爆体験者のお話から学んだこと**

被爆体験者の梶本さんのお話では、原爆で怖いのは爆弾ではなく、放射線にさらされることだということ、戦争で助かっても、大切な人を失ってしまった悲しみや心の傷などがその後の人生にまで影響してしまう、そして、多くの人々の死体を踏んでも何も感じなくなってしまったという話や、戦争当時は溶かして武器の材料にするために家庭で使用されている鍋なども使っていたという話が特に印象に残っていて、普段、家庭で使われているものを使用するほど追い詰められた状況だったということを知りました。

**(3) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

平和公園では、ガイドの方の「今も骨の上を歩いている可能性がゼロではない」という言葉が印象に残り、戦争がすごく身近な事に感じたのを覚えています。平和資料館の見学では、実際に広島を訪問しないと見るができない、ボロボロになった服などの展示や人々の写真や多くの資料を見て、より詳しく当時の様子を知り、戦争の悲惨さや恐ろしさ、原子爆弾の威力などを痛感しました。

**(4) 放射線影響研究所訪問から学んだこと**

放射線影響研究所では、被爆は爆弾にさらされる事で被ばくは被曝と書き、放射線にさらされる事だということ、人は今この瞬間も被ばくしているという事を学びました。

**(5) その他、広島訪問から学んだこと**

今回私は、平和使節団として広島で多くのことを学びました。その中でも、特に印象に残っているのは袋町小学校平和資料館の見学です。袋町小学校の壁面には被爆者たちが書いた、消息などを知らせる伝言などが記され、そのメッセージは消えることはなく、今も壁面、そして人々の心に残されています。

**3 研修を終えて****(1) 友達や家族に伝えたいこと**

今、当たり前にある平和は幸せだということや、奪われたり、自ら奪っていい命はないので、1つ1つの命や人生を大切にして生きてほしいということを伝えたいです。

**(2) これから行動していきたいこと**

忘れられた歴史は繰り返されてしまうので、平和使節団として広島で学んできた事を皆に伝えていくこと。そして、自分や周りの人の命を大切にしたいと思いました。

**研究課題：戦争が及ぼす影響**

おくの義務教育学校      8年      椎名凜音

**1 研究課題設定の理由**

広島に行くまで、広島に原爆が落とされたことは知っていたものの、具体的にどのような被害があったのかは知らなかったので、広島を実際に訪問して最も印象に残ったことが、戦争や原爆が及ぼす影響のことだったからです。

私のように被害について詳しく知らない人がいると思ったので、このことを伝えなくてはならないと思いました。

**2 研修の記録****(1) 被爆体験者のお話から学んだこと**

被爆体験者である梶本さんのお話を聞くと、原爆が落ちた時になんとか生き残ることができて、放射線を大量に浴びてしまった影響でその後に原爆症にかかってしまったりして、結局若いうちに亡くなってしまう人が多くいたそうです。また、放射線を浴びた女性は子どもに原爆症がうつってしまうかもしれないという理由で差別を受け、結婚することができない人がたくさんいたそうです。

**(2) 平和資料館および平和公園（原爆ドーム）から学んだこと**

平和資料館や平和公園に行くと、実際に広島に行かないと見ることができない展示物などをみることができ、より戦争の悲惨さや当時の様子などを知ることができました。

**(3) その他、広島訪問から学んだこと**

私は広島を訪問し、平和の大切さ、戦争による影響を学びました。戦争により被害を受けた場所やものを保存しておくことで、若い人々にも戦争について知ってもらおうとしているのだとわかりました。そして、「戦争は繰り返してはいけないもの」だということを伝えようとしているのだと思いました。

**3 研修を終えて****(1) 友達や家族に伝えたいこと**

戦争で被害を受けた人は、その当時がなくなってしまうのはもちろんだけれど、その後も戦争の影響で病気になってしまったり、女性は差別されるようになってしまったりと、つらいものになってしまうことがあります。

**(2) これから行動していきたいこと**

牛久市の代表として、私たちが広島に行き学んできたことを地域の人々に伝えるということはもちろん行い、また今こうして私たちが生きているのは当たり前のことではないので、自分の命、周りの人の命を大切にして生きていきたいと思います。それらのことが今の私たちにできることだと思います。

**研究課題：原爆は本当に必要だったのか**

おくの義務教育学校 8年 川上 司

**1 研究課題設定の理由**

私は去年の夏に『「ある晴れた夏の朝」：小手鞠るい』という本を読んで、原爆は使用してはいけないのだということを知りました。しかし、同時にその当時は原爆は必要悪であったという考えも持ち始めるようになりました。そのため、この牛久市中学生平和使節団に行きたいと思い、研究課題を「原爆は本当に必要だったのか」にしようと思いました。

**2 研修の記録****(1) 被爆体験者のお話から学んだこと**

私は梶本さんの講話を聞いて、やはり原爆は使用してはならないものだと考えました。梶本さんのような実際に原爆を体験している方は年々減っています。ですから、日本に原爆が落とされ、たくさんの人々が悲しんだということを伝えていかなければいけません。そのためには、私達中学生もこのように平和を広めていかなければいけないと思いました。

**(2) 平和資料館および平和記念公園から学んだこと**

平和資料館からは、当時の遺品（弁当箱、日記、はがき、など…）の悲惨さや、原爆で亡くなった人の遺骨の残酷さ、当時の建物の残骸で人々が苦しんでいる様子などを知ることができました。平和記念公園からは、原爆死没者のための慰霊碑に書いてある〈安らかに眠って下さい過ちは繰返しませぬから〉という文章の本当の意味を考えることができました。その考えとは、〈安らかに眠って下さい過ちは繰返しませぬから〉とは、主語がないので世界に呼びかけていることではないかという考えです。

**(3) 放射線影響研究所訪問から学んだこと**

放射線影響研究所 略称（放影研）Radiation Effects Research Foundation（RERF）では、原爆の放射能についてたくさんのことを学びました。一度に 100 ミリシーベルト以上被曝すると健康に影響が出ること、放射能によるがんの仕組みなどを研究していることがわかりました。

**(4) 本川小学校や爆心地近くで学んだこと**

本川小学校では、珍しい体験をすることができました。本川小学校は原爆が落とされた当時のまま校舎が残されていました。本川小学校の窓はアーチ形で、地震に強い構造になっていました。さらに本川小学校は、日本で初めて鉄筋コンクリートでできた小学校で丈夫だったため、原爆や爆風にも吹き飛ばされずに残っています。しかし、なぜ原爆ドームは爆心地に近いのに、残っているのでしょうか？原爆が爆発したときに、爆風が台風のような形を描くんだそうです。台風の真ん中は、台風目と言って、風が全然吹かないところができます。原爆ドームはその台風目の中に入っていたから全壊しなかったそうです。※原爆ドーム（正式名称：広島記念碑）は過去に、「広島県物産陳列館」、「広島県商品陳列所」、「広島県産業奨励館」の順に名前を変えています。

### 3 研修を終えて

#### (1) 友達や家族に伝えたいこと

日本は地球唯一の被爆国であり日本自ら平和を広めていかなければいけないということを広めていきたいです。

#### (2) これから行動していきたいこと

私はこのような体験をして、原爆の伝承者が減る中で私たちのような中学生たちも原爆の恐ろしさや平和を広めていかなければいけないということ、今この世にはたくさんの原子爆弾があるのをなくしていかなければいけないこと、そのためには地球唯一の被爆国であるこの「日本」が平和を広めて、最終的には世界を完全な平和にしなければいけないということ、そのために、今ここから平和に向かって進み始めていきたいです。

